

外集団脅威に対する防衛的心理機構： その多様性と性差の解明

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、集団間葛藤を引き起こす人間の心理メカニズムの特性を、特に外集団からの脅威（外集団脅威）への対処メカニズムという適応的機能、およびその多様性と性差に注目しつつ解明しようとするものである。本論文の特徴は、従来の社会心理学における集団間葛藤研究とは異なり、人間の行動パターンと心理メカニズムを社会環境への適応の産物と捉える適応論の立場から分析した点にある。

人は一般に、自らの所属集団を優遇し、他の集団を冷遇する内集団ひいき (ingroup favoritism) の傾向を持つことが知られている。従来、この現象は集団間葛藤の原因として扱われ、単一の心理メカニズムから生み出されるとされることが多かった。しかし、社会心理学や進化心理学における近年の研究から、内集団ひいきを生み出す心理メカニズムは単一ではなく、複数の独立したメカニズムが働いていることが示唆されてきた。本論文はこの観点を更に深め、次の二つの新たな仮説を検証するものである。第一に、人間には外集団脅威に対処するための適応心理メカニズムが実装されている。この心理メカニズムは、状況手がかりが与えられると発動し、適応行動、つまり内集団ひいきを自動的に引き起こす。更に、この内集団ひいきは、内外集団間の利得の差を拡大しようとの競争的な動機に基づく。第二に、この適応心理メカニズムには少なくとも二種類あり、それぞれが、外集団からの妨害の排除と、外集団からの汚染の回避という独立の適応課題と結びついている。以上の仮説を検証するため、実験室実験と質問紙調査の合計五つの実証研究が行われた。

まず、実証研究 1 において、本研究で仮定する外集団脅威への適応心理メカニズムが、そもそも人に本当に備わっているのかどうかを、プライミング法を用いた実験室実験にて検証した。その結果、予測通り、事前に外集団脅威の状況手がかりを与えた参加者は、内集団成員へ非協力的に振る舞う誘因が存在する社会的ジレンマ状況においてですら協力行動を増加させること、そしてその背後には内外集団間の利得の差を拡大しようとの競争的な動機があることが示された。(実証研究 1)

続いて、実証研究 2 と 3 において、外集団脅威への適応心理メカニズムの多様性を明らかにするために、どのような種類の外集団に対して、いかなる属性を持つ行為者が、どのような心理メカニズムを発動させやすいかを検討した。

まず、実証研究 2 において、外集団の種類と本研究が注目する二種類の適応心理メカニズム（外集団による妨害の排除／外集団からの汚染の回避）との対応関係を検討した。近年の

進化心理学の研究において、外集団の種類が異なれば、それに対して知覚される脅威の性質も異なるため、発動する適応心理メカニズムの種類も異なるとの指摘がなされている。また、社会的認知の分野においては、「集団らしさ」の認知には、大きく分けて、成員間の外見の類似性に基づくものと、成員間の行動の協調性に基づくものがあるとされている。実証研究 2 では、これらの議論に基づき、脅威を知覚する対象である外集団の外見的特徴と、知覚される脅威の種類、およびその結果として発動する適応心理メカニズム（特に集団間感情）の種類との対応関係を検討した。実験室実験と質問紙調査の結果、次のことが明らかになった。第一に、人びとは、自集団と異なる外見的特徴を共有する外集団に対して、未知の病原体や価値観に汚染される「汚染系脅威」を知覚する傾向にある。その結果、人びとはそうした外集団を回避するため、その行動を導く嫌悪感情を抱きやすい。一方、集団成員の振る舞いが互いに協調的な外集団に対しては、自集団の資源が掠奪されたり、身の安全が危機にさらされたりする「妨害系脅威」を知覚しやすい。その結果、人びとはそうした外集団を攻撃して排除するため、その行動を促す怒り感情を生起させやすい。（実証研究 2-1, 2-2）

実証研究 3 では、外集団脅威を知覚する行為者の属性により、実証研究 2 で明らかにした二種類の適応心理メカニズムの発動しやすさが異なるか否かを検討した。ここで扱った属性は性差である。先行研究において、男性は一般的に他者からの妨害系脅威に反応しやすく、女性は汚染系脅威に反応しやすいことが示されてきた。本論文では、こうした異なる種類の脅威への反応性の違いが、男性と女性の外集団脅威の知覚とそれに対する集団行動の違いにも現れるはずだと予測し、二つの実験を行った。その結果、予測通り、男性はプライミング法を用いて事前に与えられた妨害系脅威の状況手がかりに反応して、後の最小条件状況において外集団差別を示した。一方の女性は、事前に与えられた汚染系脅威の状況手がかりに反応して、後の最小条件状況において外集団差別を示した。ただし、二つ目の実験では、男性に備わった心理メカニズムの結果が再現されなかったり、脅威の手がかりが何も存在しない条件ですら男性は差別を示す傾向があったりなど、今後の検討課題が残る結果となった。（実証研究 3-1, 3-2）

総合考察では、以上の研究成果を整理し、総括的な考察を行った。本論文で明らかになったのは、人間に備わった外集団脅威への適応心理メカニズムの存在とその多様性であり、このいずれが発動しやすいかは、外集団成員の外見的特徴や行為者の性別といった要因により左右されることであった。そして、これらの知見が集団間葛藤研究やその解決に対してどのように貢献しうるのか、また残された理論的、実証的な問題点について議論した。特に、本論文で仮定する心理メカニズムが厳密な意味での「進化」の過程で獲得されたとの確証が不十分であることや、内集団への協力的行動の増加に伴うただ乗り問題が未解決であることなどが挙げられる。これらの問題は、著者が取り組むべき今後の課題である。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 結 城 雅 樹

副 査 教 授 山 岸 俊 男

副 査 教 授 煎 本 孝

学 位 論 文 題 名

外集団脅威に対する防衛的心理機構：

その多様性と性差の解明

本論文の目的は、集団間の葛藤を引き起こす人間の心理メカニズムの特性を、特に外集団からの脅威への対処メカニズムという適応的機能、およびその多様性に注目しつつ解明しようとするものである。その際、人間の行動パターンと心理メカニズムを社会環境への適応の産物と捉える適応論の立場をとっている。

人は一般に、自らの所属集団を優遇し、他の集団を冷遇する内集団ひいき (ingroup favoritism) の傾向を持つことが知られている。この現象は集団間葛藤の原因と考えられるが、従来は単一の心理メカニズムから生み出されると仮定されてきた。しかし、社会心理学や進化心理学における近年の研究からは、内集団ひいきを生み出す心理メカニズムは一つだけではなく、複数の独立したメカニズムが働いていることが示唆されている。本論文はこの観点を更に深め、次の2つの新たな仮説を検証するものである。第一に、人間には外集団からの脅威に対処するための適応心理メカニズムが実装されている。この心理メカニズムは、状況手がかりが与えられると発動し、適応行動、つまり内集団ひいきを自動的に引き起こす。第二に、この心理メカニズムには少なくとも二種類があり、それぞれが、外集団からの妨害の排除と、外集団からの汚染の回避という独立の適応課題と結びついている。第三に、以上の二種類のメカニズムのいずれが発動しやすいかについては、性差がある。具体的には、男性は妨害の排除を目的とした内集団ひいきをしやすく、女性は汚染の回避を目的とした内集団ひいきをしやすい。以上の仮説を検証するために、実験室実験と質問紙調査の合計5つの実証研究が行われ、仮説をおおむね支持する結果が得られた。

本論文が当該研究領域に与えるインパクトは次の2点にまとめられる。第一に、人間に外集団脅威に対処するための心理メカニズムが実装されていることを、状況手がかりを与えるプライミング法を用いて実証的に明らかにした点である。過去にも、実験参加者を実際に外集団からの脅威状況に置くことにより、内集団への協力行動や内集団ひいき行動が増加することを示した研究はいくつか存在した。しかし、それらの結果は、その状況における個々人の合理計算に基づく行動を示したに過ぎなかった可能性があり、外集団脅威への適応心理メカニズムを直接検証した証拠としては不十分であったと考えられる。本研究の結果は、人間

に、本人が知らず知らずのうちに外集団脅威への対処行動を示させてしまう、深く根付いた適応心理メカニズムが実装されていることを示した画期的なものである。

第二に、内集団ひいき行動を生み出す心理メカニズムの多様性を、適応論の観点から理論づけ、またその存在を実証的に示したことである。先述のように、従来の枠組みでは、内集団ひいきや差別や偏見など、集団間葛藤に係わる心理メカニズムは、全て一様なものとして仮定されていた。適応論的立場を採った先行研究においても、集団内の相互依存性のみを内集団ひいきの原因としていた。本論文はこれに対し、個々人を取り巻く社会環境の多様性と、個々人が解決すべき適応課題の多様性に注目することにより、外集団脅威に対処するための複数の適応心理メカニズムの存在を同定し、それを実証的に弁別することに成功した。

ただし、本論文にも理論的問題は残されている。それは、本論文で仮定する心理メカニズムが厳密な意味での「進化」の過程で獲得されたとの確証が不十分であることや、内集団への協力行動の増加に伴うただ乗り問題が未解決であることなどが挙げられる。ただし、これらは今後著者が取り組むべき検討課題であり、本論文が示した学術的価値を損なうものではない。本論文の研究成果は当該研究領域の発展に大きく貢献するものであると評価することができる。

本委員会では、申請論文を慎重に審査し、また口頭試問を実施して十分に審議を重ねた結果、全員一致で横田晋大氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。